

論文要旨

学位論文題目 「弥勒の造形の諸相 韓国と日本」

氏名 金丸（岩崎）和子

釈迦滅後 56 億 7 千万年後に釈迦の救済に漏れた衆生を救うとされる弥勒は、無仏時代の現在兜率天上で菩薩の姿で思惟し、後に如来となるためにこの世に下生する。従って、仏像として造像される場合も菩薩形と如来形がある。菩薩形の場合、兜率天上で思惟する姿である半跏踏み下げ思惟像、曼荼羅に描かれる密教的な弥勒菩薩、蓮華を持つ弥勒菩薩、塔を持つ弥勒菩薩、坐像、立像ともにある。如来像も坐像、倚像、立像があり、手印も触地印、与願・施無畏印の変形など多様である。本論文は、具体的な作例を通して弥勒の造形の諸相を確認し、韓国と日本の作例を比較しながら造形の持つ特質を探ろうとするものである。

第一部では半跏思惟形の弥勒菩薩の性格の特徴を作例にそって考察した。

ガンダーラに始まる半跏思惟像は、聖と俗の狭間に位置し、世俗世界と解脱世界の媒介者として捉えられていた。その後半跏思惟像がインドにおいて発展することはないのだが、中央アジアから東アジアにおいて、弥勒信仰と結びついて新たな展開をみせる。中国では半跏思惟像は、悉達多太子思惟像であるか、弥勒信仰と関わるとみられる尊名が明らかではない思惟像であるかが考えられる。北齊代ごろには弥勒菩薩像として造像された可能性も考えられる。

朝鮮に伝わって成熟した半跏思惟像は、兜率天上の王者として、あるいは下生して成道前に思惟する弥勒菩薩の姿として造像された。日本では、伝来の当初から半跏思惟像は弥勒菩薩像であった。もちろん仏伝中の悉達多太子思惟像もあったが、単独像としては弥勒菩薩として基本的には認識されていたと思われる。

韓国国宝 83 号像、宝冠弥勒につながる現実の肉体をもった半跏思惟像は、下生した弥勒の成道以前の姿と考えられ、この世における弥勒菩薩である。したがって、新羅においては花郎と結びつき、日本においては聖徳太子と結びついた。その結果、新羅統一という目的を達成した統一新羅時代になるとこの系譜の半跏思惟像は消滅していく。聖徳太子と結びついた日本では、聖徳太子信仰の高揚に伴い、半跏思惟像の一部はより現実感のある形式の半跏思惟形の聖徳太子像に取って代られた。

兜率天上の王者として荘厳された半跏思惟形の弥勒菩薩は、豊かに装飾された韓国国宝 78 号像に代表される。そこに連なる百済的要素をもつ半跏思惟像の系譜が日本にもある。これはおそらく兜率天上生を願う目的にかなうものであろう。

しかし、日本での弥勒信仰は飛鳥、白鳳時代にはまだ個々の仏像の尊格に格別の違いがなく、単に「仏像」として、追善供養や現世利益のために礼拝されていた。半跏思惟形の弥勒についても大きな区別はなかったと考えられる。天智朝頃から個別に尊名がわかる場合が増えた。弥勒に対して兜率天上生を祈る例が見られるが、これも追善供養とみられる。奈良時代には阿彌陀信仰が盛んになった。追善供養としては阿彌陀如来像造像の方が増加するのは当然の成り行きであった。

第二部では、その後の弥勒の造形の例をみた。

奈良時代末から平安時代になると密教の影響を受け、たとえば十一面観音の呪術的な力による現世利益が求められるように、優美な姿をした仏像より、力を実感できる迫力のある仏像が好まれた。現実的で具体的な祈りには、聖と俗の狭間の親しみのある半跏思惟像より、室生寺の弥勒菩薩立像のような強い霊験が感じられる檀像風木彫像が好まれたと思われる。

こうして弥勒菩薩半跏思惟像の造像はなくなったが、弥勒の造形として、もう一つの流れに大仏がある。釈迦滅後にこの世

に下生する弥勒は、大仏である。今まで注目されることがなかった韓国の大仏から、弥勒の造形の別の側面が見られる。韓国灌燭寺の石造弥勒菩薩菩薩立像は、世俗の権威との結合のシンボルである二重の宝蓋をいただき、大きな石が地上に湧き出たので仏像を造ったという伝説をもつ。韓国では灌燭寺以外でも巨大石仏が化現したという伝説がある場合が多く、さらに、明らかに弥勒ではない大仏も、現在では地元の信者たちから「ミロク」と呼ばれ、礼拝されている。

日本にも同じような性格を持つと思われる石仏群があり、新潟関山石仏群のように多くは弥勒と呼ばれ庶民の信仰を集めている。そしてこれらの石仏は、自然物をそのまま礼拝しているように、もとの石の姿を髣髴とさせるものもある。石がそのまま仏になって現れたのであり、木がそのまま仏になった立木仏と同じような考えであろう。

下生した弥勒如来は、韓国でも日本でも、七世紀には弥勒大仏として造像されていた。白鳳時代の造立になる下生する弥勒の姿を表わした笠置寺の弥勒如来像は、鎌倉時代以降摸刻像も造像され、兜率天に上生したいという人々の願いを受け止めた。日本における弥勒如来の形である。法然の阿弥陀専修念仏に異議を唱えた貞慶は笠置寺に隠遁し、無仏時代の救いを弥勒に求めた。この願いは庶民にまで広がり、図像的には下生する弥勒を表わしてはいるが、上生信仰の対象としての弥勒如来像が造像された。阿弥陀浄土への往生と並んで人々に浸透していった。

庶民にまで広がっていく過程で、弥勒の現世的な性格、つまり将来的にこの世に実際に現われ人々を救う存在としての性格と、聖と俗との狭間に位置する中間的な性格から、より親しみのある存在となった。現世利益の要素が強くなり、関山石仏群のように、身近な仏として存在するようになった。

半跏思惟像は、本来仏像としては主役とはなりえない姿勢でありながら、日本では当初から弥勒菩薩であったので、寺院の本尊となるものもあった。しかし、弥勒であり、左右対称な厳格さを崩した半跏思惟形であることは、聖と俗の狭間の存在であった。たとえ半跏思惟像が造像されなくなっても、弥勒の造形は、その後も形を変えながらもその性格を保持し続けたのである。

釈迦を継ぐ存在としての仏嗣、弥勒。現在はまだ菩薩の状態で思惟を続ける弥勒。韓国と日本の作例を通して、人々に親しみを持って信仰され続けていることがわかった。特に、従来ほとんど注目されなかった高麗時代の巨大石仏や日本の石仏などを考察することから、半跏思惟像とは形は異なりながらも、身近に感じられるという弥勒の性格の一貫性を確認できた。